



2913
9

特

昭和九年
七月六日
東京

貞操婦女八賢誌三編下

東都

狂訓亭主人編次

第十七回

由井瀧の花の方船樓を備
金言を折るて八代耻辱を蒙

新拾遺集小鶴が岡木高き松を吹風の雲井小ひく萬代の声と詠けん
抑相模國鎌倉郡由井郷雲井の峯鶴が岡八幡宮八康平六年秋八月
伊豫守源頼義奥州征伐の時初て勸請ありて一か永保元年の二月陰
奥守源義家修造を加へて下り後代々の武将尊信亦厚く仰せ
今日らん三月の初旬社頭の花八爛熳と咲揃ひ空不知と見ぬ花の雲松の

女八賢二輯卷之三

小枝小降はゆる景色のゆる桃李山吹椿海棠の盛あらし境内
春の詠の時を得り御園の花亦き榮て最良深き其旨趣を花の
方申せし御館の女中八心樂しく未明より變化粧劣し履下と出さハ
由井の濱辺より寄る梅の花貝櫻貝姫貝をも准らぬ徒女のれば
雅ハ唯思安貝愛らしき姿色漆風情と六後刺の浦曲を思ひかゝるの囀
有る一さま其日の己の刺頃俱供と揃へつ扇ヶ谷の館を練が鶴が
園の社奉を遠らる半の刺の半時ゆりつ迄境内の花を餘邊の秘め
多の漸く由井の濱辺近付て遙小向方を見波一多ハ貴賤の俗
男女と接まらばさうし小曠き砂原を絡繰とて相續き東ハ景政の

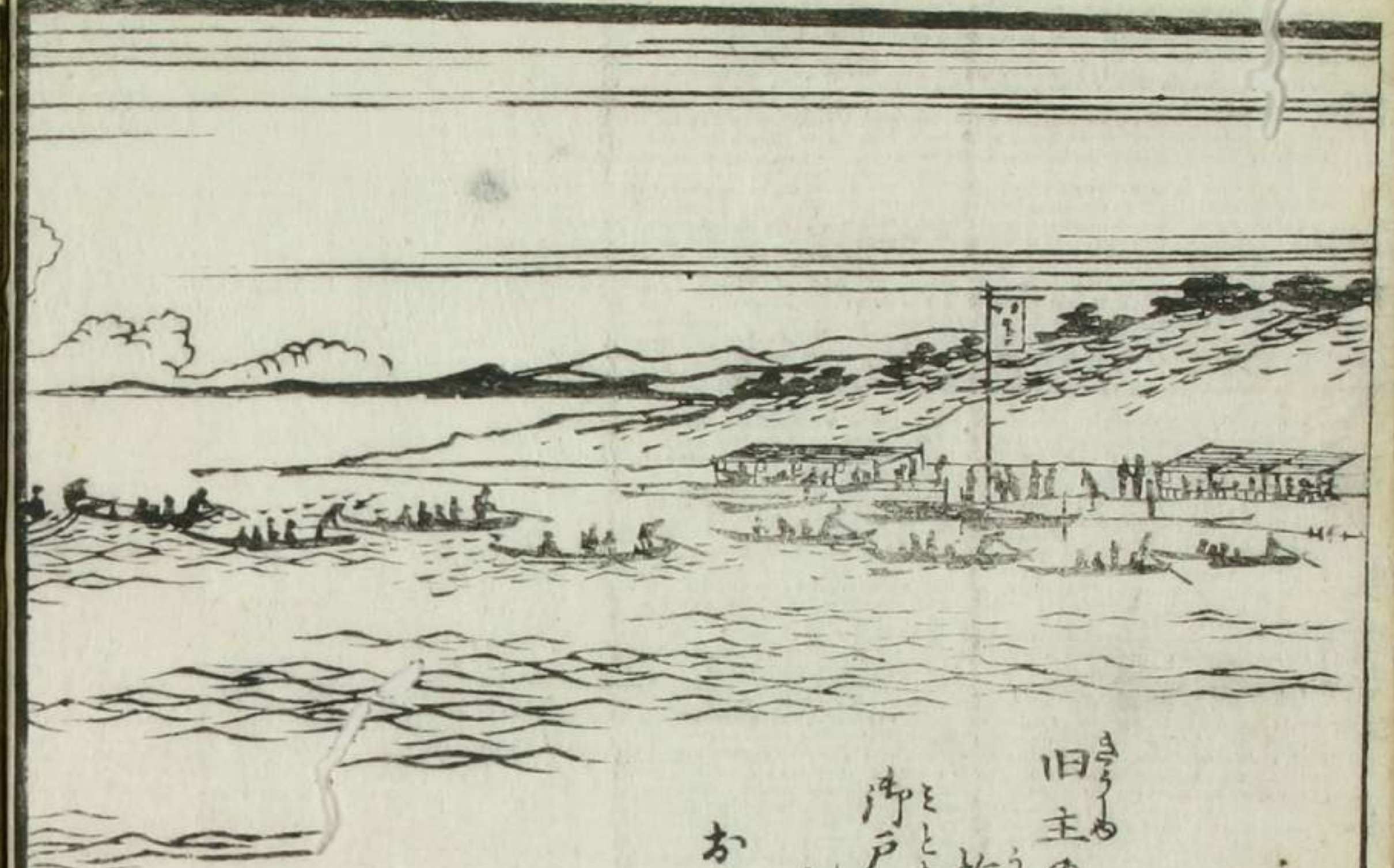
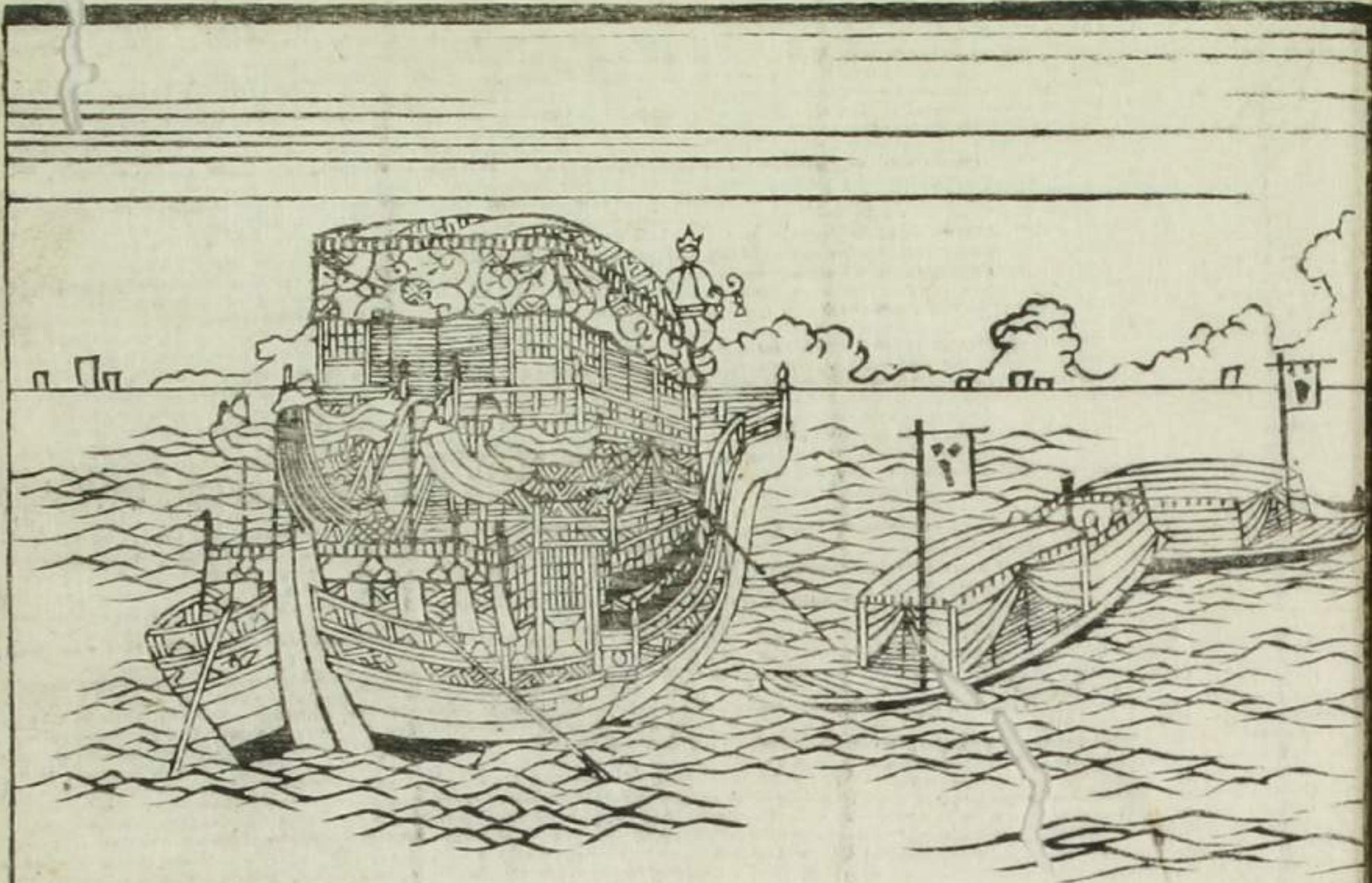
塔の邊より西ハ盛久の松の側まで連なる夏林の如く斯て花の方ハ紫
物を由井の若宮の辺に留止らる多くの徒女小作附て既ハ磯際ゆりこ
らせの六通船小乗悉くせて飾備へ大船小頓てそ接しきあせけり
這時まはく番木と備へる小船の遠所彼所より乗出我れ
漕舟御戸帳拜の百子船は来のさぬの賑ハく餘生の海の深藤ハ
潮も遠く霞江の鳴山の晴渡つて風景のらん方もき斯て花の
方ハ二階造りの御船の上の間小在りて遙小沖の方を詠め亦陸の方を
視る多の榮ある葉残るけりこひの中ハ喜悦兼ての作ありけり
遠清の貧しき者ハ永樂錢を施行せし如劫小討つ山内殿へ

聞えても外園思く有る先山の内の奥方より竹笠森の
観音奉納ありと稱錦の御戸帳ハ蜀江の錦といふ噂の
ゆゑ録倉中の人々今日這樣小群集して持離るるの更なる
まゝ今奉納の御戸帳ハ山内の奉納よりなる小日敷の遅後
のまゝと施行を以て下を賑ハ錦の戸帳も諸人の知らせ後と迄も
語を傳えん勢は此度の催ハ彼方さぬの鼻を挫扇が谷の威を
輝きと譽えとありと嬉しけは定て市街の風聴も遠方とと賞
讃てぞあらんと自慢心の在せし其下情成穿つと来よとそ八代と
呼ぶ下は女中未青年處女さども賢き者ありとそ今朝最

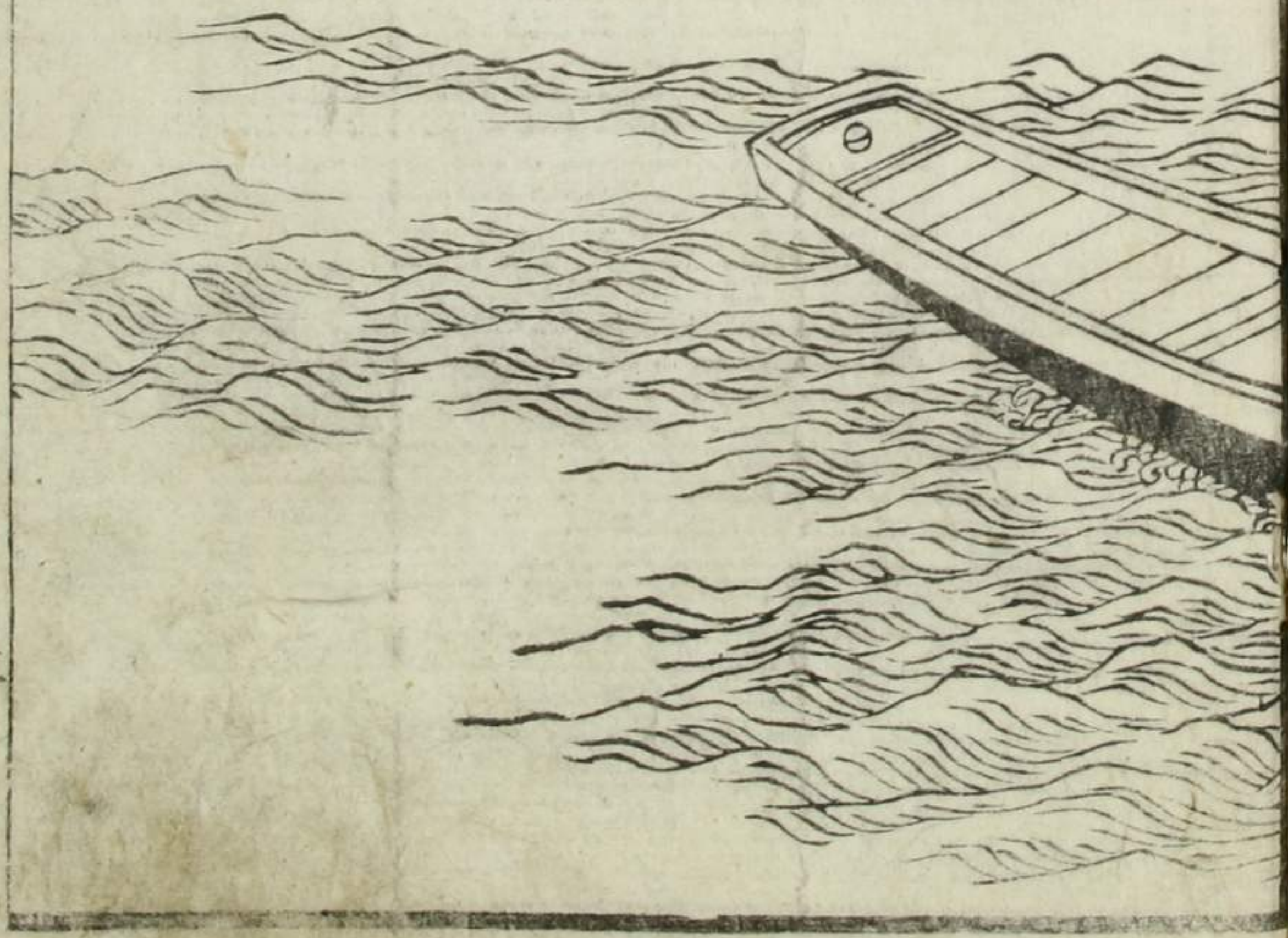
早く風園を聞きたる爲は次と省させひとく出遺るも只今
歸り参りしとお次の衆の取次バ花の方ハ鈍げは又ハ侍候
在つるものと下仕りのとも苦しくは目通り許と疾遠方と急
がせのへ其後ハ由側女中ハ参りし呼ぶと由次ハ常ハあはる
由作ハ心驚く八代が固辭申せど團入を獲て由前へ誘ひ八
代ハ耻しむ億は胸に其席ハ蹲踞と花の方ハ夢原ハ太儀ハ
ありしぞ八代と密書と申付し置か近の進で街の噂成
聞せしう一奈何申て居つる此度の妻が討らひ山内殿ハ負を
此家の威光を増所爲と定めて言も傳ふるらん左ハあはる

代は漸く首領少く上より左右と顧會釈して
 代と何ぞの事か承次せ 花 苦い人の早ふ言て團あやの夕 八代「左松
 多む免せあつて申す事 花「サテく早ふ團あやの夕 代有
 の後へ恐さ多く申上る不遠とあはれは程もあやうけは申
 上は保不忠とる他の尊も君の爲ふ 早ふ申上る人の
 らのりまとしてあつてまた今朝か館をぬくして諸人の人並波の計
 知る風俗一と團あやの夕 種々の尊の一例とあつて
 が因願負との評判の勿体なひ変るる芝居の尊と同く変山内
 まふ代諺るるあまはれの家で笑ふ人も亦憎ひ松でも埋の當然せ申

者があつて 八代どの前後は湯で山椒嫌ふるるね松と宜く
 申上るまよ 花 善悪の事も隠しよ不及早ふ言や 代 彼是申し其
 申小本覺寺の門前へ備ごらりまよ 多くの諸民又等が批判致のを
 よく一團て居て居るまよ 中前のまよ 傳々くお噂や 婿の奴 一妾が
 変をいと言てまよ 方迄腹をまよ 代 折角御家の御威
 先と山内の庄屋留小芳らせまよ 思へば世世借の大能餓鬼丹
 誠を水の泡に申消さのまよ 魅の癖恐さ多くはまよ 中前様
 のまよを遠くまよ 各團らり 代 成るる上徳の國の笠森寺へ
 約の品るるまよ 代 成ても山志八通の山内うら奉納の蜀江の



旧主のいふ小
梅太郎
江戸帳の
船に
おも
むく



知の巾沙汰が美しひとと申し召て大人氣のさひ此度の由趣向昔昔錦
と大姑も他思を飾る船楼珠入八石永焼香と作らるる底の
殿小伽羅がすくさみの力少袖小留木の重を瀬と刀を来らるるもので
あらしひけらるるまゝの御戸帳もえせれ其他家の物 幸
八代との誓バ少妙で申してアま極る失禮を 花 一や聞りけてはま
多の小團拾らるる這身の如後の覺悟のさす又あつたまの
でもさひサ其後ハ何と言も包まばやて團せてもトの温順なる由
赤八代ハ遠慮さく 代ハ殿の中でも委しむる錦の御戸帳を
何振して團傳へて居るにせり昔昔錦の古渡りのと作山一評判

赤も江前ハ武藏の豊嶋家ハ傳来し錦凡古昔旗當時でハ
歎時方と争ふ中の豊嶋の市空越路の長尾ハ分捕小多の團
けさど扇が谷の管領へ歎とるの両家 長尾 豊嶋
由もさひ関の東と管領の御家の似合ぬ糸女ハ討ひ非禮ハうけぬ
神佛ハ備へる錦の如所ハ後らうら明らる出し御家の死であふ
とらうら申す 幸ハ八代餘りる理直多の言葉兼そを其
方ハ阿容こと言まて團て歸るこの奈の女子の身なればとて由錦ハ社
多らうら其終ハ團退して放たると由前ハ由らるる人今もさく人備の
下輩の誘言 代ハ其時ハ私も堪ぬる西態と腹立しくぞんト

まゝに流るる中なる理を思ひ當らざらんば、
模範を擇びてまじも密に申す所の、
迷ひて、
八代より申すを、
その思ふ其方の、
ごころをせぬ、
申すに、
衆女さん、
谷の御館も、
勝負は、
まゝ申家の、
まゝ申す、
然と、
多の、
思ひの、
さる、

素生のいさゝか疑ひまを放心く山見負ありて何れやあぶらひ油の
と常にお葉がやまを及又善悪の御戸懐も他所の古衣と園に
ま由の品今月此根の晴るく鎌倉中の人々持離ても笠森寺の
奉納の後の日豊嶋の家より取入小糸のまひ中さなせだるうき

まごころ御籠の私とまごころ思ふく付忍まごころ元人より御前へ山見元
中よあ止せ程山見葉あぶらと申すは申すの申奉るころ憚り代に存まひ
ト健氣も言出く主母の女子の稀多る諫の言葉も耳ふまごころ死の
方術氣まあ〜八代を白眼つめて存せがち側左左を見く〜とあひ

何と園も元女人の八代も意外の言葉も付くる役目を他他の誰
〜とあひ

通の早〜退ひヨ急度計の礼助せのト作の下よりまごころ役目の女中の
八代と舌長ありとわな情みおて在〜まごころおし知を侍兼く〜とあひ

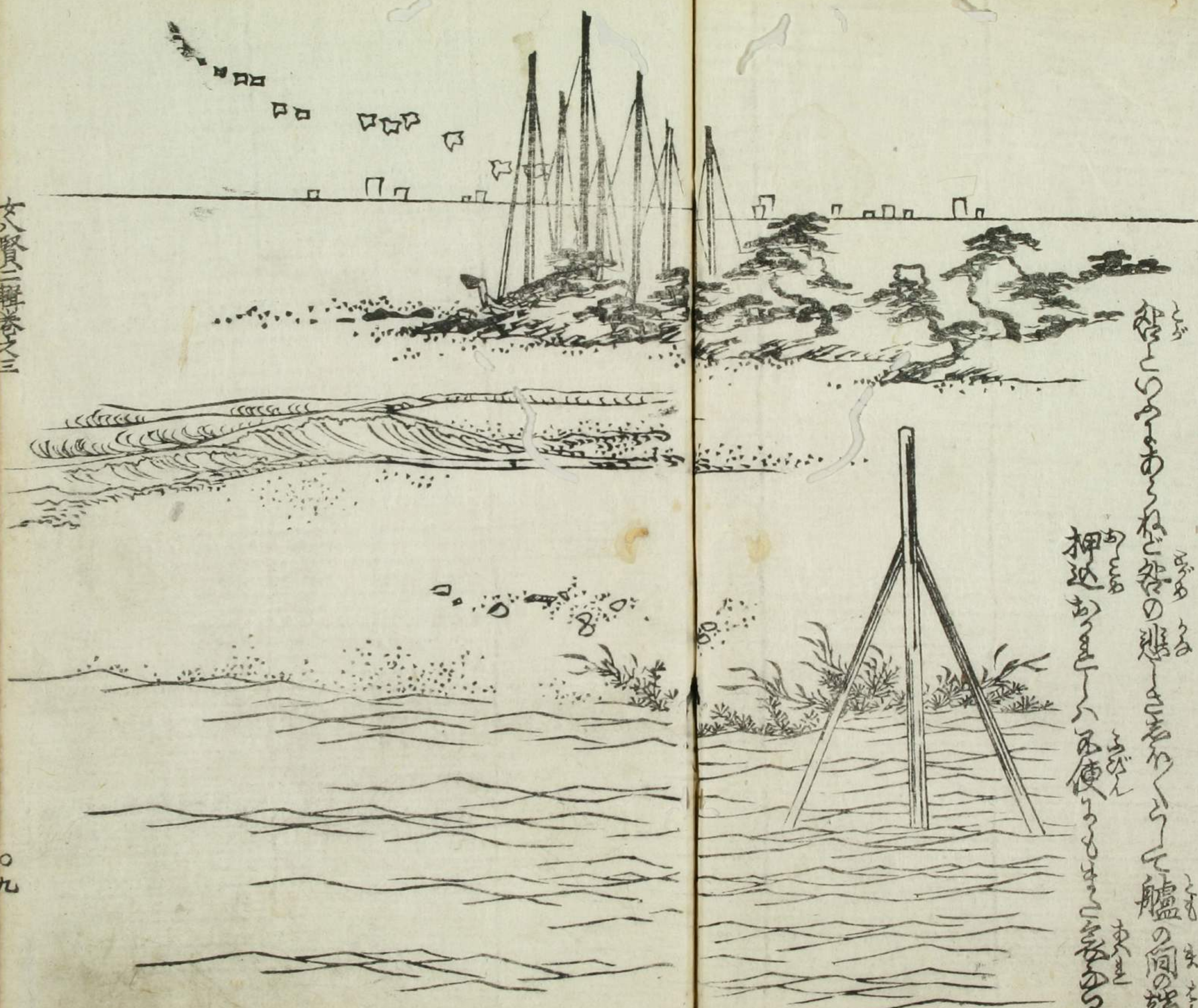
風情をうて退取巻 廿五まの八代との隙を中廿六先登至極
〜とあひ

お側お人もまひ格ふ 一お奥へおまね身せりて内船も〜も御前へ
内目見 一か体まひるを有難ひ内見と思ふところのあを 一身の程知らぬ
野町あり〜一廿五まの角のト言まごころ八代はまごころゆり格を

まごころ〜画面まげの顔赤らも眼み涙と〜つ忠義のひも露みまごころ知
る〜まごころに情と思ふと捨方も荒けりまごころ追左右まごころ成捕てを引

女八賢二輯卷之三

〇八



舟首尾の形を以ての次に出るの時小川首を八代と入八代と
 言ふ同く俣軍も類向多し物も言合ふねの
 舟の形もねの形もさかしくて艦の向の形も
 押込の形もさかしくて

この時神宮の孝子よりける大塚の里の梅太郎ハ義父本兵衛の越路より
帰る来たる途申めて横死と遂るる期ハ先ひつらり豊嶋の重宝
等曼鈴の御旗を尋る爲に故々を立出に配るる事万苦諸方を
久く徘徊させし今日鎌倉の地小暮り長谷寺の境内に休まる折
幸由井が横辺の船旅餓鬼鈴の鈴を御女帳にはさし置て
胸裏して發せしが思案を極め次女代儀に渡す此所より小舟とあり
して楢村が崎の辺りまでありてを求めける

第十八回

賢女勵志御戸張於船登
許罪才女船樓向捕手

斯て其日の申刻の頃より船と陸との参詣人々見物の貴賤男女も半
分ふるて歸路に越え旅籠鬼供養の僧も早經文の紙を結び船樓と
あるとき小舟小舟乗て岸より花の方の歸館を待て寺小舟と相
あつた時楢村が崎の方よりや乗出しけんと思入一艘の早舟もあつた
御戸帳の船小舟乗付がま小舟より船樓の船小舟より者ハ茶齡二
八たりの美羅處女より各番の紙を推し御戸帳を守護せ
下はの女中四五人抱くつるの會釈して第三重の上を登りて夜香色を開き
焼香の多しを見まば左にハるくして早くも御戸帳を引下し押
入て腰帯を解き十文字より綾よりして舟中不負樓の上より登高く

二階の圓の居る下は日向の御戸帳を護の流女さへ内苦勞を係
まてを氣の妻も存りまはるが這御戸帳の元の主豊嶋左衛門信
國の家来神宮秀齋の娘梅と申の養父主事衛門過失ひける錦の
旗只今申賜り申す古主の豊嶋へ持帰り君と父との死辱は雪り古郷へ
飾る錦の旗は並夢の名に帰恋のよづる花の方さめ人此後をよろしき
梅は内披露を頼み申す下はの女中思ひかけり
大膽の言葉は何と返答を留時猶縁在けるさすぐは建武年
申す今ふのころ合戦の絶ぬ世思ふ生まぬ武家小はゆる女中されば
互小顔を見合ふが氣を励まして樓の上を白銀多るふ大音上一病が

ちの中威光も内場所ごとくも女へ田舎處が大膽な顔とわづら御縁の役人
流傳を求めて討つぬまをも願ひひで恐まきも御戸帳をよめふせう
只今知るは梅もあつた寛治やト異口同音小変うけて先一番小走せ
よろ下はの中の勇壯の身指ひして頂上の階まで既に飛上り引下さんと
組対後より續て三四人登る階子のよろは梅太郎へ一を叫んで組とて
先を振るがさつとつてをうて投せバトより電る階子の續く女中の首の
よろり投落して一圓の上階子を踏まがとたつとつと伸さぬ小倒れて
急訓の同志うち小唯がやくと強ぐの折しも海上小異げある思雲の
變驟とて霹靂よると見へる見越が嶽のうらふ雷て春雷の音空の

御覽にけしむ船長等八人きふ周章發彼成亥の大風が吹かさんとすまはし
るほど源氏山の山おろしふ吹散さるる用意せりと聞きて磁を引上り岸の
方へ漕近付んと梶を取直し一艦を押し入る騒ぐ又御座船の二階の
間へ遠眼鏡をもちて先刻より沖の景をよと御座船の往通ひを
見て在せし今異しき白痴ありて御座船を奪ひ取んとすまはし
護の女中が左にさむと筆ひききども竟れ不及船樓より下の間へ落
さる其風情言の葉くさる聞へねど亥の模様いふふとるごとく眼珠の
見へけるゆゑ花の方へ顔を傾け最腹をさし市をまいて 花 見よ只今
船樓へ次におきき處女が参り錦の戸帳を盗取逃んとすまはしを女子が
押止めてまはしとすまはしと既におよぶね形容ハ凡常なる曲者ぞや取
逃まぬ中け船より早く加勢の者をまはりヤトまがりて作せぬ内側の
女中は是れと驚き沖の方を遙く視やまはしはけり俄にまはして浦を
の群飛まふ風をさき今迄ありて 百千船の皆悉く渚へ歸りて
御座船の船をり大船といひ高樓の船はむりて自由なるは海
景をよのまはしと心怖る女中連雷の音高くまはしものおま
あきまはしふお知を讀て梅太郎のあはしにむれんと言者る一えま
はしは女中の侍元ハ由井の若宮おかへさせ船より水主のものおま
奈何よまはしと聞けは花の方へ氣を苛てまはしよりゆひ 花 女子の儀は



所為もせし管領職の奥方と稱し妾が眼並に最上層に在り
 たるは一人の處女が氣にきりて取押んとては
 陸を呼ぶまじき事なり誰かとも女子の中を捕まの役を付し
 八汐に在るる奈はせしぞとりまのまを席へし家の間の階を
 よう山前も汐下げ中老八汐 俄の更のお人様と誰彼とす
 ても遠處を去り 更のお役も間をりして八取逃して 花小や通の
 船の者は何所へ逃去つて戸帳を飾りて一船の外は左の船も
 今一方より兼付するまで八取逃の多し船樓前後思はれ不覚のもの
 捕とて難い更でもいはいも早よ捕まの役をト仰申の中は風流も
 驚くや吹下し高波きて御座船よりゆりまき出し浮沈もはく雷鳴
 たび〜のさし捕まの役をひし怖し顔見合身をも眼のくさめく
 やあ〜のさし捕まの役をひし怖し顔見合身をも眼のくさめく
 八重の汐怒の汐潮と言葉もろろて扱ふり其時八汐の花の方
 向の礼義平く 疾くは機嫌をそむきま〜兼付の者を問ひま〜
 免を頼みのやまの人の怒をま〜ま〜火急の更のあしやま
 先刺の落度み付て押込し付置ま〜八代が徳義の志や〜
 恐入し後悔り〜居まの室中只今の一太の何卒自極成
 い〜ま〜を功の由説言命を係て勤ま〜るを健氣な顔の
 申すの由も〜るが〜何ひま〜し〜取次は上花の方ハ〜
 女賢二輯卷之三
 十四

大役と推しの思の寄ゆらねば是罪なりや思しけん「あきらむ海河
の免しとせむや功をまきまき其因の罪もゆるして取まき早ふくト
廿三の空最の一座のホット真八汐の意は艦の回りつて八代と呼
出— 汐— 方方の種ひけ八汐がまきまき— 中てお同海は早ふく小
船に乗て 我— 有るる存じまはるトのふよう早くまきまき水主の
ゆもゆもがと 最の密— 傳馬船の忍ぢひるるをまきまき水主の
中らも撰ま— 建者の二人が艦を押切てそくまきまき漕行の樓の船の諸
の方へ漕返さんと挽て取艦椅子つてまきまき風に向つて働く難波
樓の上へ大板太郎が乗来— 小船の迹たると殊に漕子の下へまきまきの
女中が逃取巻漕子をまきまき足せついで捕んとする人より船を浦辺へ
寄せらまきて敵の大勢をまきまきりて奈合のしするまき退きまきりつて
と胸をのりまきりつて勇の折け— 情と思の根免ても退れぬ
— 大の命原、最初う知まきつる所為をりながら何今更し
驚くへまき腕の豊鴻の名を叫— 笹蓑文錦の御簾を我にた入く
脊に負ひまき再度敵のまき渡さんや命の限り切抜るん叶はぬ
け終の青海原の底に沈む浮む瀬どまき我魂を御簾に止めてお
護を遂げりつる古郷に送る— ちおの極めて憤然と四方に
白眼船樓の突立あがり— 容体の大丈夫をそく弱女ふれたと

見えざる顔がせふ柳の眉の清く一七世より白き腕と長く延くと
 柱をとり人棲うらげせし裾高けよび紅ひの湯具所係つて風の
 そよぐふ肌と顯り紅白の花の咲るがごとくそよぐ宋朝の女大
 ね一丈青がのりて梁山泊へ入らうる次女は堀河御所の夜討を成
 せし静ゆの侍の備ゆ准らるべしと磔せてりらん方もうけ時風を
 まはく強くの方へと吹ちまれば八代の女も早船ハ颯風であら
 り早く脱け御戸腰の船へ近付ども波と風をよぶあざめられ
 ぬしこをいでて我度の右左と漕まらり近付くをすれを隔て
 らるる同じ祈まらるるして廻る危き怖きと遙か此方の山座船を

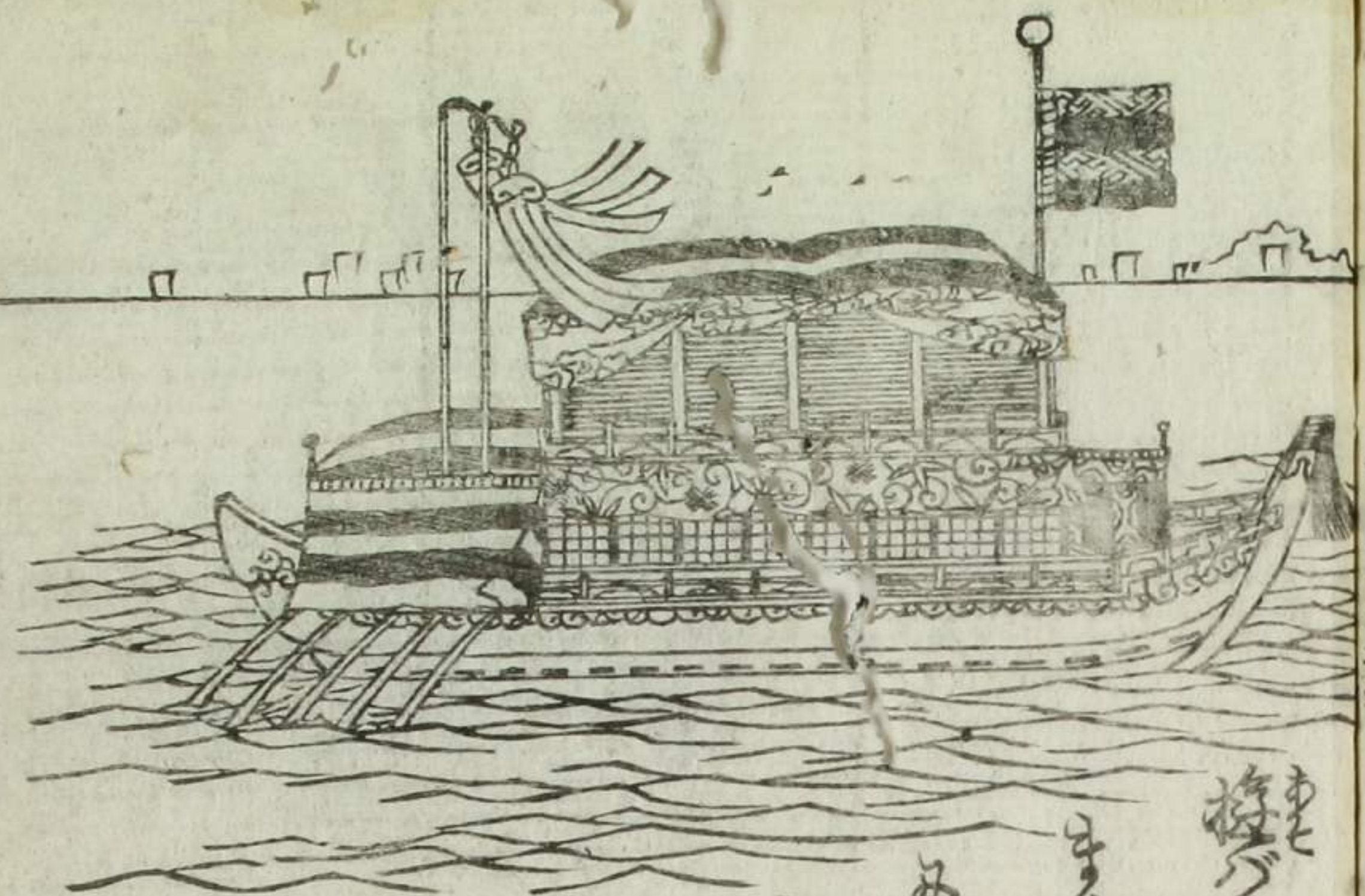


女八賢二輯卷之三

限同と流して波がさうねるも早船とて行は
 帰るべきに僅促くまが花の方へ進み中漸く陸へ
 上りまらせて渡辺の賢岡に棄物を傷み直して神
 の方せまらるるにせむ見とるの甘くまへの女中へ
 左右に居らるる花の吹雪と白浪の飛散る
 儀の花紅葉の灯の影の清葉枯葉と名をいふ
 四季の美人草入相の鏡よ頼ちるでおののけ
 詠めて居らるるにまらるる晴ある八代が捕まの業も
 船の上奇きまらるる心せのまらるるま主がうねりの



船もほせにまろく暫因とてまろく此度の
 船一丈をうらふ余近付け六代八兼て用
 意をまろくつる銚縄の跡を繰るまろく
 一まろくけまろく大船の振まろくけ六代兼
 ても船降てカセ極も引まろく頼を踏まろく
 中せまろくめく是元踏まろく難多まろく上る
 八代侍輩の會敷せ一衆まろくのまろく
 是余まろくを鳴呼まろく思一カまろく奥
 まろくの山下知まろくおまろくまろく幸免せ



女公賢三輯卷之三

梅づせ入一イまろく世もその振る内遠まろく入
 ませぬ何所まろく香川の處女まろくやまろく町方
 其珍まろく一山の上の狂娘と油断のまろく
 御戸帳を引下して古主の家へ持てゆ
 え八豊瀧の家の家他家の室を御戸
 帳へ管領藏に似合ぬ新篇と行旅
 中理屈のある極ま豊瀧の威増女
 娘の癖に思ひの外の大膽の命を
 捨てて並曼錦を返返してと覺

